

明治・大正期の精神医学教科書に見る「聾啞と精神病」の関係性

～ 呉秀三と三宅鑛一 ～

當 間 正 敏

関東聾史研究会

あらまし：本稿においては、近代日本において精神病と聾啞がどのように結び付けられていたかについて、明治から大正期にかけて発行された精神医学教科書のなかでも呉秀三と三宅鑛一の両名による教科書を中心に検証した。その結果、両名の教科書において、白癡及び白痴の項目において、この精神病の特徴として聾または啞が列挙されていることがわかった。

1. はじめに

明治から大正にかけて東京府巢鴨病院（現東京都立松沢病院）に入院していた聾啞（啞・聾・耳聾含む）患者の精神病名に「白癡」「續癡狂」「中酒狂」「早發性癡呆」「癲癇性精神病」があげられていることは、當間（2012）によって明らかになっている。

これら精神病名の診断が正しいものであったかどうかを検証する過程で当時使われていた精神医学教科書を調査した結果、「白癡」の場合は聾が多いという記載が呉秀三の『精神病学集要』に、そして三宅鑛一は「白痴」患者には聾及び啞が多いとの指摘を『精神病診断及治療学』にておこなっていることがわかった。これらはいずれも明治から大正期にかけて発行された精神医学教科書である。

そこで本稿においては、この『精神病学集要』及び『精神病診断及治療学』にみることができる精神病と聾啞の関係性について整理した。

2. 明治から大正にかけての 主な精神医学教科書

日本における近代精神医学教科書の歴史は明治9年（1876）の『精神病約説』に始まりをみる。これはHenry Maudsley が『System of Medicine』の第2巻で書いた“Insanity”（精神病）を基に、京都癡狂院の医局員であった神戸文哉が翻訳して発行したものである。

その後、明治20年代から30年代にかけて日本人による近代精神医学教科書が相次いで発行されるようになる。その中でも代表的なのは、江口讓『精神病学』や川原凡『精神病学提綱』、石田昇『新撰精神病学』、高松彝『精神病学綱要』などといった優れた精神医学教科書である。また、東京帝国大学医科大学教授の呉秀三の『精神病学集要』と、呉秀三の教え子で後に東京帝国大学医学部教授となる三宅鑛一の手による『精神病診断及治療学』といった精神医学教科書は当時としては極めて優れた内容であると評価されていた。

以下、明治から大正にかけて発行された、精神医学教科書のうち代表的なものを列挙する。〔表〕

3. 呉秀三と精神病学集要

呉秀三は東京帝国大学医科大学教授として精神病学講座を受け持ち、東京府松沢病院の初代院長に就任した人物である。

その呉が明治27年(1894)から28年(1895)にかけて出した『精神病学集要』(全2巻)は日本最初の本格的な精神医学教科書と評価されている。この時、呉は巢鴨病院の医局員であった。

そして大正5年(1916)から大正14年(1925)にかけて、『精神病学集要 後』の続編として計3冊を出している。この続編は呉精神医学の集大成といっても過言ではない。なお、大正14年に呉は定年で東京帝国大学教授を退官、東京府立松沢病院院長を辞任している。

さて、明治28年(1895)の『精神病学集要 後』において、呉は白癡について47頁を割いているが、このなかで聾啞との関係性について述べた個所はない。そのため、この当時、呉は白癡と聾啞の関係性についてどう考えていたかを本書からはみることができない。

しかし、前述の『精神病学集要 後』を大幅に書き改めて増補第2版として発行された、大正7年(1918)の『精神病学集要 後編 第1冊』における白癡の項目にて、呉は最も重い白癡患者に見受けられる身体的徴候として「視覚・聴覚も不完全なことがあり(盲・半盲・聾)」を挙げている。続いて少し軽度の白癡患

表 明治から大正に発行された代表的精神医学教科書

書名	発行年	著者
精神病学約説	明治9年(1876)	モーズレイ
精神病学	明治20年(1887)	江口譲
精神病学提綱	明治27年(1894)	川原汎
精神病学集要 前	明治27年(1894)	呉秀三
精神病学集要 後	明治28年(1895)	呉秀三
精神病学要略	明治30年(1897)	呉秀三
精神病学	明治35年(1902)	門脇眞枝
精神病学氷積	明治36年(1906)	荒木蒼太郎
新撰精神病学	明治36年(1906)	石田昇
精神病学診断及治療学	明治41年(1908)	三宅鑛一・松本高三郎
精神病学綱要	明治44年(1911)	高松彝
精神病学枢機	明治44年(1911)	荒木蒼太郎
袖珍精神病学	明治45年(1912)	松本高三郎
精神病学集要 (前)	大正5年(1916)	呉秀三
精神病学集要 (後1)	大正7年(1918)	呉秀三
最新精神病学	大正11年(1922)	下田光造・杉田直樹
精神病学集要 (後2)	大正12年(1923)	呉秀三
小さい精神病学	大正14年(1925)	雨宮保衛
精神病学集要 (後3)	大正14年(1925)	呉秀三

者においては、やはり身体的徴候として「五官にも弱視重聴がある」としている。

つまり、呉は、重い白癡の場合には聾が関係し、それより軽い白癡は聾ではなく重聴が関係していると考えていたようである。

また、呉は台湾総督府からの依頼を受け、明治42年(1909)から翌年の明治43年(1910)年に調査のため台湾を訪れているが、そこでクレチン病と思われる聾者9名を診断した記録が残されている。

そして『精神病学集要 後編 第1冊』では「くれちにすむ」という項目(現在はクレチン病)が置かれている。当時、クレチン病は内因性精神疾患の一つとして考えられていたためである。ここで呉は、この病気の流行が盛んな地方には聾

聾、重聴、吃語の者が多いと述べている。直接的な原因として聾啞を挙げているわけではないが、クレチン病と聾啞との関係性を意識していたのではないかと思われる。

4. 三宅鑛一と精神病診断及治療学

三宅鑛一は東京帝国大学にて呉秀三の門下に入り、精神病学を学び、後に東京帝国大学医学部教授及び東京府立松沢病院長に就任した。呉精神医学の後継者としても有名である。また、東京帝国大学医科大学生理学教室教授の永井潜を理事長として昭和5年（1930）に創立された日本民族衛生学会にも幹部として参加した。

その三宅がまだ東京帝国大学医学部精神学講座の講師であった明治41年（1908）、千葉医学専門学校教授であった松本高三郎との共著という形で『精神病診断及治療学』という精神医学教科書を発行している。

この『精神病診断及治療学』において、三宅は白痴について「精神發育状態ガ兒童七八歳頃マデナルモノ」と定義しており、特に教化不能白痴について「知力ノ發育最モ劣等ナルモノニシテ、第一、感覺器ニ多クノ障礙ヲ認メラレ、盲、聾、聾、ナルモノ少シトセズ」と述べている。これに続いて、「白痴ニハ癱瘓、麻痺、痛覚脱失等ノ外、種々ノ変質徴候、頭蓋ノ異常、色盲、重聴、鼻口腔ニ於ケル腺様腫増殖等ノ身体的異常多シ」としている。

以上から、三宅は呉と同様に白痴と聾啞の関係性に言及していたことがわかる。ここで特に注目したいのは、呉が『精

神病学集要 後編 第1冊』にて白痴と聾啞について述べたのは大正7年であるから、三宅は呉よりも17年前に、白痴と聾啞の関係性について言及していたことになる。

5. まとめ

東京府巢鴨病院の院長を務めた呉秀三及び三宅鑛一はいずれも精神病の特徴として聾または啞があると、自らの手による精神医学教科書において述べていることが分かった。これらの影響及び他の教科書調査に基づく検証並びに呉と三宅のなかで聾啞と精神病がどのように結び付けられていたかの更なる研究深化が求められるが、それは今後の課題としたい。

6. 参考文献

- 岡田靖雄（1981）『私説松沢病院史』,岩崎学術出版社
- 岡田靖雄（2002）『日本精神科医療史』,医学書院,2002
- 風祭元（2012）『近代精神医学史研究』,中央公論事業出版
- 呉秀三（1895）『精神病学集要 後』,吐鳳堂書店
- 呉秀三（1918）『精神病学集要 後編 第1冊』,吐鳳堂書店
- 呉秀三（1911）「余の臺灣旅行 上」,『神經學雜誌』,9
- 呉秀三（1911）「余の臺灣旅行 下」,『神經學雜誌』,9
- 當間正敏（2012）「東京府巢鴨病院時代の聾患者に関する一考察」,『聾歴史月報』,59
- 當間正敏（2013）「近代日本の精神病院における聾患者」,日本聾史学会2013年聾史セミナー
- 松沢病院120周年記念誌刊行会編（2001）『松沢病院120年年表』,星和書店

三宅鑛一・松本高三郎（1908）『精神病診断及治療学』,南江堂